



越ヶ谷達磨の眉と鬚

高橋大蔵氏描く

七轉八起越ヶ谷達磨

荒川の長江、綠樹飛び交ふ武蔵平野は爽快な気分を漂はせて一行を迎へて呉れた。

▽門内廣潤で、鬱蒼と茂る珮羅樹林を背景に、柵に並んだ盆栽の美事さ、更に手入れの行届いた大小の百樹も氣持がよく、如何にも舊家である印象を受入れた。今、我がの並んだ縁先の中庭は梅の老樹龍の如く枝をまじ交はし、その他

▽大袋驛の名所案内には、米、麥、桃、梅などの特産物がある。如何にも驛の埒近く鬱蒼たる灌木が葉の色にそれらしい塔列である。田甫傳ひに土地の説明懇ろな増永東道君は少々不安を覺えてか、一足先へ駆け去つた。家を突止めて前觸れもし、迎ひに引つ返すつもりらしい、有坂會長は第二の東道を引受け、藪壁に添ふて街道へ導く途かに増永君のせかせかした後姿が見へたが、何處やらへ消失せた

▽地勢肥沃の地、路面平坦に閑寂な舊街道は野趣を存してゐる。有坂會長は此處だ／＼と左側の門へ這入る。一行も續いて縁近くへ一列に五人男の剝科白でも始めさうな顔付きだが、肝腎な増永君が裏道傳ひに我々を迎ひに行つたとやら、更に呼び戻しの人が走ると云ふ賑やかさ、おあとからお光きへ涼しい西向の縁側に一間座を占め乳放れ頃の可愛らしい子猫も一行の目を惹めて呉れた。

▽門内廣潤で、鬱蒼と茂る珮羅樹林を背景に、柵に並んだ盆栽の美事さ、更に手入れの行届いた大小の百樹も氣持がよく、如何にも舊家である印象を受入れた。今、我がの並んだ縁先の中庭は梅の老樹龍の如く枝をまじ交はし、その他

の立木を育くんで居る。苔蒸した土の色も嬉しく、垣越しに見上げるやうな懐なごの老樹には雀の囀が賑やかだ。さだめし歓迎の辭を述べて居るのであらう。有坂會長は「アレは何さ云ふ鳥でせう」「雀ですよ」「ア、さうか」と幽遠境で耳にする雀の鳴聲も奇鳥に聞へるのは不思議だ。眞實不思議なのはカツユウ鳥の耳近かに啼くのである。増永君も加はり何代前かを使用した達磨の木型を鑑賞しつつ座敷へ主客圓を描いてかしまる。お茶に明喉を潤し草加煎餅に眼の色を變へた一同は、豫備知識として質問の矢が放たれる。此家の主人公高橋大蔵君初め、生産者側は熱心に之れに應答して和やかに分を醸出した。

▽張子の木型は軽くて早く乾燥し

▽七月の東京例會は越ヶ谷達磨の生産地へ大舉訪問だ。淺草雷門の東武電車正面階段下へと集合する所謂遠出である。之が花柳界の衆なら遠出盤に野暮つたい風姿で、鼻の下の長い娛親類筋を待合はずのだが、吾々ではいつも乍らの素野暮揃ひで、映えぬこと夥しいテ△梅雨シーズンではあるが、天候

に恵まれて降りもせず照りもせぬ梅雨日和だ。中には洋傘を聊か荷厄介にした用意周到な老人もあつた。越ヶ谷ではあるが、二つ先き「大袋」で下車するのだと切符賣場前で増永君の東道振りも鮮やかだ。越ヶ谷でもてるのは、一行中では有坂會長と増永君だけであるのは聊か心細いが、青田の戦ぎ

型に狂びが出ず木割れせぬことを條件として、桐に選定してあるのである。張子紙（もとの砂糖袋に使用した紙の精製せぬもの）を水貼二枚、日本紙（反古紙）を一枚貼りとする。紙の水分は桐と日本紙とへ吸収されて乾燥し、木型に画した部分は型から自然に剝がれる。之を刀で背部を割きて型から放し、刀を入れた部分、即ち剝れ目を数ヶ所利目を丈夫な紙で塞ぎ更に日本紙二枚を上張りとし、敷（尻土）を取りつけて、乾いた頃

胡粉を塗り辨慶（菖菖）へ指して乾燥し色彩を施すのである。要するに紙張は下張二枚、中貼一枚、上張二枚と云ふ五枚張である。敷は田甫の土で型に依つて大小幾種類を作り置き取りつけるので、土に布目のあるのは土型が布を着せてあるからであり、尻の中央に穴のあるのは辨慶へ指して乾かす必要上から用意してあるのである。

マ纏て半里も先から態々取寄せて下すつた古利根川（中川流域）の段と、高橋君の令閨が手料理の新鮮な畑のものに舌鼓を打つて煮飯

を済ませ、一息入れて座談會に移つた。生産者側六名の内、高橋大蔵、中村勇太郎、松崎武雄、松崎仙吉、萩原七五郎の五君は達磨専門で、松崎柳之助君は俗に型物師と云つて張子人形製作者で首振虎など得意である。東京亀戸では同君から仕入れてゐることを耳にした。野狐禪が先年亀戸へ行つた時

追及したら「實は鴻巣の馬へ亀戸の天神を乗せて居ます」と自白した。鴻巣とか越ヶ谷仕入へ亀戸の色彩を施し、亀戸人形で御座いなどは余り香ばしくないと思ふ。

（小山）お暑い所を御参集下さつて有難う御座いました。本日は越ヶ谷達磨の生産地訪問と云ふので生産者の方々にも御出席を願つて座談會を開くことになりました。先づ有坂會長から話題の御提供を願ふことにします。

（有坂）越ヶ谷達磨の實地調査を試みたのはもう二十年近くになりますから、これまで来たのは玩具人の中で恐らく私が最初であつたかも知りません。それだけ高橋さんとは古い馴染になります。その馴

染深い土地で、古い懐かしい皆様に集つて頂いたことを感謝します。けふはこちらからも遠慮なくお尋ねしますが、皆様も亦忌憚のない意見をお述べ願ひたいと思ひます。先づ、高橋さんから越ヶ谷達磨の發祥と高橋家の代々についてお話し下さい。

（高橋）高橋家の初代は八太郎で此處一櫻井村から小半道ある船渡の産で明治初年に歿してゐます生前此處に移住しました。二代は八藏と云つて續の描法が自慢でした。三代定次郎は八藏の次男で一時横濱へ移りましたが長男が死した爲め實家に戻つて家を継ぎました。四代重藏は養子で、五代が自分と云ふことになりました。

（有坂）越ヶ谷達磨が高橋家に依つて船渡から移植されたが、船渡で達磨をつくられた動機はどう解されますか、今でこそ各地との交通はラクですけれど、當時の船渡のない土地で、さうした所に突然達磨がつくられるやうになつたと考へられません、例へば、他地

方につくられた達磨を見たとか、でなければ達磨の生産者が移住して来たとか……

（高橋）初代が達磨を創作した動機が傳はつて居らず、越ヶ谷に八太郎以前に生産されたと云ふ話は耳にしてゐますが、形跡はありませぬ。

（有坂）だる吉のことですね。此傳説は越ヶ谷達磨の發祥を理由づける何物かはあります。

（田中）要するに、高橋家に依つて越ヶ谷達磨が堅價をあげたのでその以前からあつたかの如く宣傳すると云ふ手もあると思ふ。

（有坂）越ヶ谷達磨の隆盛期はいつでしたか。

（高橋）日清戦争後、即ち明治四十年頃で、八藏の晩年に隆盛の機運を得たと云ふ譯です。

（有坂）販路はどうです。

（高橋）自分の製品は川崎の大師へ出してゐます。これは余談ですが、前方、店先へ置くと味の素工場の空気に觸れて褐色するので、此頃は中へ入れるやうになりました。